

徳島市昭和小学校 「学力向上実行プラン」

(1)基礎的・基本的な知識・技能の習得

研究テーマ

- ①「アクティブラーニングの視点に立った、わかる授業の工夫・実践」
- ②「児童の聞く力・表現する力の育成」

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員 4学年推進員 中内 悠久哉	管理職	校長:新田 恭一	教 頭:西岡 秀信
	委員	6学年推進員:森 美帆	5学年推進員:林 真由
		3学年推進員:多富 美智	2学年推進員:荒井 佳代
		1学年推進員:森 千江美	1学年推進員:前嶋 拓磨

校長

新田 恭一



児童生徒の状況	具体的目標(めざす子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よ さ	ドリル学習やスキル学習に取り組む習慣が付き、基本的な漢字の読み書きや四則計算が定着してきている。	国語科単元テストの「言語分野」の平均正答率を、低学年を90%、中学年を85%、高学年80%以上にする。算数科単元テストの「知識・理解」の平均正答率を、低学年を90%、中学年を85%、高学年80%以上にする。	ノートの点検を定期的に行い、指導の充実を図る。また、パワーアップタイムなどの時間を活用して多様な問題を解く機会の確保に努める。		
課 題	学力に二極化傾向がみられ、各学年に学力の低い児童が数名いる。下位層では、学習に取り組む日頃の態度なども、基礎学力の定着に関係していると思われる。苦手意識が基礎学力に大きく反映していて、学習意欲の向上が課題である。	①「板書を工夫し、ノート指導を定期的に行っている」(自己評価)の割合を90%以上にする。 ②「児童の実態に合わせた内容の確認テストを定期的に行っている」(自己評価)の割合を80%以上にする。 ③「学習ガイドなどを活用して多様な問題を解く機会を設けている」(自己評価)の割合を80%以上にする。		評価	次年度における改善事項
	具体的方策(教員の取組)	取組指標			

(2)知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況	具体的目標(めざす子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よ さ	与えられた表現の場で、積極的に自分の考えを表現したり伝え合おうとする態度が見られるようになってきた。	国語科における「読む力」、算数科における「数学的思考力」を評価する問題の正答率の到達目標を、各学年の発達段階に応じて設定し、達成できた児童を70%以上にする。	引き続き、相手の意図を捉えながら聞いたり、考えの根拠を明確にして話したりする話し合い活動を推進する。また、学習活動の中に自分の思いや考えを書く活動を短時間でも継続して取り入れる。		
課 題	決められた手順のない場では、スキル学習(話す・聞く)の成果が十分に発揮されていない。理由や解決方法などの自分の考えを、自ら進んで表現することに苦手意識を持っている児童が多く、算数科における「数学的思考力」を評価する問題の無回答率が高い傾向がある。	①「話し手の意図を捉えながら聞いたり、自分の考えの根拠を明確にして話したりする話し合い活動を積極的に取り入れている」(自己評価)の割合を85%以上にする。 ②「書く活動を取り入れ、自分の考えを深め、まとめる機会を積極的に設けている」(自己評価)の割合を90%以上にする。		評価	次年度における改善事項
	具体的方策(教員の取組)	取組指標			

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況	具体的目標(めざす子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よ さ	ドリル学習やスキル学習に取り組む習慣は定着している。好んで本を読む児童の割合も増加している。	自主的に学習に取り組んだ児童の割合を80%以上にする。(自己評価カード)	学習チェックシートを活用して、繰り返し学習習慣や家庭学習について指導する。引き続き、学級文庫の充実と朝の読書タイムの時間確保に努め、児童の読書習慣の定着を図る。		
課 題	決められた課題には取り組むが、自分から課題を見つけて主体的に取り組もうとする態度は育っていない。また、学習に必要な物がそろっていないなど、宿題を提出し忘れていたりするなどの学習習慣が定着していない児童が見られる。	①「授業に児童の主体的な体験や活動を積極的に取り入れている」(自己評価)の割合を85%以上にする。 ②「学習チェックシートを点検しながら指導し、学習習慣の定着を図っている」(自己評価)の割合を80%以上にする。 ③「読書指導を積極的にしている」(自己評価)の割合を90%以上にする。		評価	次年度における改善事項
	具体的方策(教員の取組)	取組指標			

平成31年度(令和元年度) 学力向上ロードマップ

